

【書評】

小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編『中国環境政策 生態移民』  
(京都、昭和堂、2005年)

KONAGAYA Yuki, SHINJILT and NAKAWO Masayoshi co-edited, *Ecological Migration: An Environmental Policy in China*, Showado: Kyoto, 2005.

斯 琴  
SI QIN

要旨 人間はその長い歴史の中で豊かな自然認識を保ってきた。しかし、なぜ、現在の人々は自然環境が悪化していると叫ぶ一方、大自然の資源を圧搾するのか。

この問題と伝統文化の関心に深い関心を持つ評者は『中国環境政策 生態移民』という本に出会い、現代社会において、「民族の多様な文化、その文化の土壌となる生業形態が人間と自然の調和の模範としてその存在意義が再認識されるべきだ」(p.27)という本書序章の主張に感銘を受けた。中国においては、これまで環境保全を人間文化と直接関連づけて考えることはほとんどなかったからである。

本稿では、『中国環境政策 生態移民』という本を読んだ感想を ~ の内容によって構成した。本文は、まず、 ~ で『中国環境政策 生態移民』の構成を概観して、各著者の分析を考察した上、文化の側面の指摘に共感を覚えたことを示した。さらに、 ~ でこうした分析に基づいて本書における議論の進展をたどった上で、評者が気づいた問題について私見を述べ、 ~ で全体に言及し、まとめとした。

## I

『中国環境政策 生態移民』は、序章と3つの部そして終章によって構成される。

序章の前半は中国とりわけその「辺境」地域における環境問題発生とその「辺境」への中原からの移民やそれらの生業特徴との関係を、歴史学研究成果を導入し広い時空間的な視点から明確にした。後半においては、生態移民（生態環境の保全のため該地の住民を転出させる）政策そのものに焦点を絞り、その登場の経緯、それをめぐる中国国内の研究者たちの議論を概観し、とりわけ議論に見られる社会文化の進化論的な特徴を指摘したうえで、それらの議論の特徴づけと生態移民政策に見られるだろう国家の国民統合の期待との相関関係について考察を行った。その上で、もし「環境保全」が当政策の真の目的だったならば、「遅れている」から移住すべきという前に諸先住民族の人々の文化的豊かさに、むしろ留意すべきだとする。

生態の側面から生態移民を考える第I部は3つの章からなる。第1章では、生態移民政策に関して環境状況を当該地の歴史に関連して詳細に述べている。著者は地元の年輩者のメッセージに耳を傾けながら、歴史を踏まえて美しい自然環境の過去を再現した。そして、現在の悪化した状態に対して、学問の側面から環境保全の急務を呼びかけた。第2章では、内モンゴル・エゼネの事例が取り上げられている。転入地において移民の収入を確保する飼料などの農耕作物の栽培は水資源を大量消費することになる。それに伴う地下水位の低

下によって胡楊林(ポプラの林)が枯死し、結局、胡楊林の生態はさらに悪化したという。第3章は、シリングルの事例を取り上げた。そこでは、生態移民による町周辺の生態圧力、そして飼料栽培による新地開発と水資源の開発が草原生態系にもたらす新たな環境問題を指摘する。そして環境保全の視点から援助対策や、より適切な飼料運搬などの方法を提案している。第4章では貴州省の事例があげられ、国家政策と現地住民の希望のずれを見出し、解決方法が提示されている。移住を前提とする生態移民政策に対して移民せず、故地にいながら環境保全を果たす可能性が示された。

## II

経済の側面から生態移民を考える第II部は4つの章からなる。第5章では、甘粛省のヨゴル自治県の事例から、従来の生業形態はまだ経済的開発の余地があることが提案されている。そこでは、著者は環境保全より貧困問題の解決に重点をおく。第6章と第7章では主に国家の政策がいかに順調に実施されたか、その過程が記述されている。第6章では、タリム流域における生態移民政策に関する計画と実施が論証される。しかし、文献資料の考察が優位を占め、現地の生活の実際を反映した資料の論考に欠けると思われる。第7章では、内モンゴル・アラシャ盟における生態移民プログラムが紹介された。そこで、プログラムの企画を踏まえ生態移民政策の推進が著者によって提唱された。ここでいうアラシャ盟は、本書第1と2章での対象地域でもあったが、この両章で提示された現地の実情と第7章で述べられた実施状況との間にはずれがある。また、第1と2章でも述べられたように、当該地が豊か自然環境に恵まれ、牧畜業が営まれてきたというにも関わらず、第7章では「アラシャ盟における牧畜業の条件は非常に脆弱」(p.173)と指摘した。つまり、一方は従来の牧畜業の維持を、一方は農業転換を主張するのである。こうしたずれの問題はまさしく企画と実行の行き違いのようにも思われる。もしそうならば、ここで提唱される理想的なプランより現実の方が説得力がある。

第8章では、内モンゴル・オールドスの事例が取り上げられている。移住させられる牧民の経済負担と牧民全員の要望に応じる国家側の重大な財政負担が対立しないように、移民たちの意志に従う移住方針が効果的であることが著者によって示された。ここで、任意による移住という政策がとりあげられ、その説明にはメリットの変化によって移住するかどうかを決める、あるいはその変化を比較したことによって元の地へ戻ることができることと述べられている。そう考えると、生態環境の破壊による生態移民の本来の意味はどこにあるかと評者は疑問を抱く。つまり、転出地に戻ることが可能であれば、そもそも移住の必要があるのかと評者は思うのだ。したがって、経済利益を求めた移住のように思われるこの提案は果たして生態保全の効果があるのか、と反論されうるではないか。

## III

文化の側面から生態移民を考える第III部は3つの章からなる。第9章では、シリングル盟鑲黄旗の事例が取り上げられる。事例では、伝統的牧畜業から酪農業などの他の産業へ転換した移民生活の実情が述べられている。そして、結果的には従来の生活様式を期待するという住民側の希望が指摘されている。第10章は、肅南ヨゴル族自治県の住民が森を神聖視する認識やさまざまな日常的な慣習を取り上げることで、彼らの自然認識の根底にあ

る論理の特徴を明らかにする。同時に、ひとつの出来事として森林破壊の責任が誰にあるのかという「問題」を検証することで、森林を守るために住民を移住させねばならぬという政策側が依拠する論理と住民側のそれとの相違を露にした。第11章では、生態移民政策にかかわる各レベルの「視点」が分析され、それらの相違点が見出された。とりわけ、国家レベルの視点と県レベルの実施と当事者レベルの考慮が考察される中で、移動対象になる住民が「移動」に対して故地を手放さないという意識が強いことが指摘されている。

最後に、終章が書かれたことは本書の研究の位置をさらに明確にしている。すなわち、本書の研究課題を、地球環境問題といったより広い範囲でとらえ、その重要性を訴えた上、水資源の問題と生態移民のかかわりから本研究の対象地域の肝心の点が総括的に述べられたのである。

総じて、本書は生態移民政策が環境保全に効果的であるか否かを異なる側面から考察するものである。とりわけ、第Ⅲ部に、評者は共感を覚える。

#### IV

しかしながら、序章で提示された本書の趣旨はどの程度まで議論されたのだろうか。すなわち、「人間を大切にすること」は「文化を大切にすること」であり、自らの文化のみではなく、他者の文化も尊重し、「人間と自然の調和」のとれた社会発展を目指すという主張(p.27)は如何に論じられたのだろうか。

本書の第Ⅰ部と第Ⅱ部ではほとんどの著者は住民の生活の実情を把握した上で、経済的効果に基準を置き、移住した住民の金銭的な収入の増減に基づいて生態移民政策の効果を指摘している。しかしこれだけでは、本書の序章で指摘した多様な文化の存在意義がほとんど確認されないことになる。例えば、生態をキーワードにする第Ⅰ部にしても、従来の生業背景を生態学的な視点から論ずることが欠如している。また経済をキーワードにする第Ⅱ部にも同様なことがいえよう。確かに、中国における生態移民政策には生態保全と貧困対策という二重の目的がある。しかし、その政策を評価する際には、人類社会が直面する共通の問題に重点を置くべきであろう。本書では、従来当該地に営まれてきた生活文化がその自然環境の破壊原因になるのか、という疑問がほとんどの著者に認識されている。しかし事例をあげて議論を展開する際には環境問題より経済問題を重視しているように思われる。評者も実際に目の当たりにしているが、生態移民政策において生業転換が実施される場合、自然資源の採掘などの生業が移民の生計に選択されることは十分可能である。そうならば、生活基盤は確保するという経済的効果はあるにしてもそれは環境保全とは両立しない結果になる。その場合、我々はこれらの出来事の背景を総合的に考えなければならないのではないか。人間の暮らす場所となる環境問題に焦点を当てて政策を評価すべきではなかろうか。人間の暮らしにおいては自然環境を基盤にして、その上に生業が成立つ。そうした土壌で生活・繁殖に適合して育った文化の脈絡をたどって環境保全を図るべきだと思う。人間の行動が文化とその土壌の環境を結びつけるのだが、この3要素は切り離すことが出来ない。そうすると、人間と文化とその土壌という3要素の問題が生態保全の根本に考えられなければならないのである。もしこの問題を生態移民政策の基盤として考えるなら、『中国環境政策 生態移民』では、各著者が同じ出発点に立たれているはずと思う。したがって、諸現象においては「移住」と「生業転換」の問題をめぐり、伝統文化を維持

するか否かとする観点でその文化の内的特質を掘り下げるとは理論の深化になると考える。そうすれば、本研究の多くの研究者は共通認識を持ちうる。

本書で生態移民政策は二つの意味合いを負う定義になりながら、その実態考察は経済生活の面で広げられたものの、文化生活の面では間口にとどまったのである。この点に関しては、第Ⅲ部にも不満が残る。9章では、住民の酪農経営の過程に注意し、その欠点を指摘している。しかし、ここでは伝統的家畜放牧との比較から従来の牧畜業の利点を挙げ、それと同時に自然環境への対応の優しさに関する言及があれば、人間と自然の相互作用の重要性がより理解しやすくなるはずである。10章では自然破壊の要因を探って現地住民の語りに注意を注いだ、「犯人」を捜査する論証にとどまったことは物足りない。現地の伝統文化の実情を知ることが期待される。11章では、人間と自然の付き合いの視点ではなく、歴史事件の認識から生じた故地を引き離される違和感が考察されている。そこで人間と土地の関わりの問題が提示されたが、単に社会的側面からの分析にとどまる。しかし、生態は依然として人間の生存する現実であるため、やはり生態的側面から自然破壊の要因を明らかにすることで、各レベルの目標を共通にすることができるのではないかと思う。

## V

一定の地域の自然は、そこに暮らす人々にとって生活文化における価値観の源になる。したがって、地域住民の生活実際に密着して、その生活行為の中から、自然の保護とその持続可能な利用につながるものを見つけることが肝要である。そのため、本書の事例でもあげられたように、現地住民の語りは傾聴に値する。このような生活当事者の語りこそ文化の側面の示唆に富み、人間・文化・自然の相互作用を明らかにしうるのではないか。自然の中に暮らしてきた人間は生活してきた自然環境を自分の身体のように熟知し、野や森が損なわれることは自らの身体が傷つくかのように感ずる。民族文化にも現れている自然を人格化する認識は自然を保全する智慧でもある。このような智慧は口承文芸などの伝統文化のなかに蓄積されている。そのため、この本の示唆する文化の側面の問いに加えて、我々は、その地域に暮らす人たちのメッセージに耳を傾け、環境を保全するために伝統文化の重要性をも訴えていくことが学問的にも社会的にも非常に重要であろう。

最後に、やはり本書『中国環境政策 生態移民』との出会いは非常に勉強になった。本の表紙にある水乏しい世界の有り様はまさに現地そのものである。その様子はまたこの本にさまざまな形で描き出されている。この本の多くの研究者は現地生活の担い手の語りを直接伝えているので理解しやすい。そして、研究者たちは各対象地域のことを分担して事実の記載を行い、その上で分析をしている。そのため筋道がはっきりしていることも本書の特徴といえよう。

評者は、ある学会の学術交流会の折に中国の研究者たちからこの本について、これまでの考え方に新しい刺激を与えたという高い評価を耳にした。まさにその評価のとおり、『中国環境政策 生態移民』は政策・現地・研究といった視線での情報が一冊にまとめられ、沢山の人の手に活用されている。この本を通じて、現代を生きる中国社会の一角を知ることが出来るのは間違いない。

(すちん 社会文化科学研究科博士後期課程)